

# 阿漕

世阿弥作

前

ワキ 日向の僧

シテ 漁翁

後

ワキ 前に同じ

シテ 阿漕

地は 伊勢

季は 秋

「心尽しの秋風に。く。木の間の月ぞすくなき。

「是は九州日向の国の者にて候。我いまだ伊勢太神宮に参らず候ふ程に。唯今思ひ立ちて候。

「日に向ふ。国の浦舟漕ぎ出で。く。八重の汐路をはるぐと。分けこし波の淡路潟。通ふ千鳥の声聞きて。旅の寢覚を須磨の浦。関の戸ともに明け暮れて。阿漕が浦に着きにけり。く。

「急ぎ候ふ程に。是は早伊勢の国阿濃の郡とやらん

申し候。暫く人を相待ち。所の名所をも尋ねばやと思ひ候。

「波ならで。乾す隙もなき海士衣。身の秋いつと限らまし。

「夫れ世を渡る習ひ。我一人に限らねども。せめては職を営む田夫ともならず。かくあさましき殺生の家に生れ。明暮物の命を殺す事の悲しさよ。

「つたなかりける殺生かなとは思へども。浮世の業

にて候ふ程に。今日も又釣に出でゝ候。

ワキ詞

「如何に是なる尉殿に尋ね申すべき事の候。

シテ詞

「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ

「伊勢の国にとりても。此浦をば如何なる所と申し候ふぞ。

シテ

「さん候此所をば阿漕が浦と申し候。

ワキ

「さては承り及びたる阿漕が浦にて候ひけるぞや古き歌に。伊勢の海阿漕が浦に引く網も。度重なれ

ば顕はれにけり。かやうによまれし浦なるぞや。

あら面白や候。

シテ

「あらやさしの旅人や。所の和歌なればなどかは知らで候ふべき。彼六帖の歌に。逢ふ事も阿漕が浦に引く網も。度重ならば顕はれやせん。かやうによまれし海士人なれば。さも心なき伊勢をの海士の。見る目も軽き身なればとて。賤しみ給ひ候ふなよ。

ワキ 「実にや名所旧跡に。馴れて年経ば心なき。

シテ 「海士の焼く藻の夕煙。

ワキ 「身を焼くべきにはあらねども。

シテ 「住めば処による波の。

ワキ 「音もかはるか。

シテ 「聞き給へ。

地 「物の名も。所によりて変はりけり。く。難波の

蘆の浦風も。こゝには伊勢の浜荻の。音をかへて

聞き給へ。藻塩焼く。煙も今は絶えにけり。月

見んとての。海士のしわざにと。ゆるされ申す海

士衣。敷島により来る。人並に如何で漏るべき。

ワキ 詞 「此浦を阿漕が浦と申す謂御物語り候へ。

シテ 詞 「総じて此浦を阿漕が浦と申すは。伊勢太神宮御降

臨より以来。御膳調進の網を引く所なり。されば

神の御誓によるにや。海辺のうろくづ此所に多く

集まるによつて。浮世を渡るあたりの海士人。此

所にすなどりを望むといへども。神前の恐れあるにより。堅くいましめて是を許さぬ所に。阿漕といふ海士人。業に望む心の悲しさは。夜々忍びて網を引く。しばしは人も知らざりしに。度重なれば顕はれて。阿漕をいましめ所をかへず。此浦の沖に沈めけり。さなきだに伊勢をの海士の罪深き。身を苦しみの海の面。重ねておもき罪科を。受くるや冥途の道までも。

地「娑婆にての名にしおふ。今も阿漕が恨めしや。呵責の責めもひまなくて。苦しみも度重なる。罪弔はせ給へや。

クセ「恥かしや古へを。語るもあまり実に。阿漕が浮名もらす身の。なき世語のいろ／＼に。錦木の数積り。千束の契り忍ぶ身の。阿漕がたとへ浮名立つ。憲清と聞えし。其歌人の忍妻。阿漕々々といひけんも。責一人に。度重なるぞ悲しき。

ロンギ地

「不思議やさては幽霊の。幻ながら頭はれて。執心の浦波の。あはれなりける値遇かな。

シテ

「一樹の宿りをも。他生の縁と聞く物を。御身も前の世の。値遇をすこし松陰に。うらぶれ給へ墨衣。

地

「日も夕暮の塩煙。立ち添ふ方や漁火の。

シテ

「影もほのかに見え初めて。

地

「海辺も晴るゝ村霧に。

シテ

「すはや手繰の。

地

「網の綱。繰り返しく。浮きぬ沈むと見しよりも。

俄にはやて吹き。海面暗くかき暮れて。敷波も立ち添ひ。漁の灯消え失せて。こはそも如何にと叫ぶ声の。波に聞えしばかりにて。跡はかもなく失せにけり。く。(中入)

ワキ詞

「いざ弔はん数々の。法の中にも一乗の。妙なる花の紐解きて。苔の衣の玉ならば。終に光りは暗からじ。く。

後ジテ

「海士の刈る。藻に住む虫の我からと。音をこそ泣かめ世をば恨みじ。今宵は少し波あれて。御膳の贅の網はまだ引かれぬよなふ。」

詞

「よきひまなりと夕月なれば。宵よりやがて入汐の。道をかへ人目を。忍びくゝに引く網の。沖にも磯にも船は見えず。唯我のみぞあごの海。阿漕が塩木こりもせで。」

地

「なほ執心の網置かん。」

シテ

「伊勢の海。清き渚のたまゝも。」

地

「弔ふこそたより法の声。」

シテ

「耳には聞けどもなほ心には。唯罪をのみ持網の。波はかへつて猛火となるぞや。あらあつや堪へがたや。」

地

「丑三つ過ぐる夜の夢。く。見よや因果のめぐり来る。火車に業つむ数苦しめて目の前の。地獄も誠なり。実に恐しのけしきや。」

地「思ふも恨めし古への。

地「思ふも恨めし古への。娑婆の名を得し。阿漕が此  
浦に。なほ執心の心引く網の。手馴れしうろくづ  
今はかへつて。悪魚毒蛇となつて。紅蓮大紅蓮の  
氷に身をいため。骨をくだけば叫ぶ息は。焦熱大  
焦熱の。焰けぶり雲霧。立居にひまもなき。冥途  
の責も度かさなる。阿漕が浦の罪科を。助け給へ  
や旅人よ。助け給へや旅人として。又波に入りにつ  
けり。又波の底に入りにつけり。